

平沢保治さん講演

中学生編

2010年3月12日収録



1 ハンセン病はどんな病気?

ハンセン病とはどういう病気だったのか、私自身は(昭和16年 1941年)13才の時にハンセン病になって、ちょうどあなた方の年令でこの多磨全生園に入院しました。

ハンセン病はかつて、「神様が罰をあてた人がなる病気だ」、「悪いことをした人がなる病気だ」、「天刑病」「業病」と言われました。

また、お父さんやお母さん、おじいちゃん、お兄ちゃんが病気だと。その家族はハンセン病になってしまう「遺伝病」だと言われてきました。

でも人間の英知はハンセン病を病気として位置づけることができたわけあります。1873年にノルウェーのハンセンという人が菌を発見したからであります。菌が発見されて病気とされた以上、何の病気でもそうですけれども、「治療して治す」こういうことが普通の考え方ですけれども、ハンセン病は末しょう神経を冒されて、後遺症が残ってしまう。醜くなる。そういう目から見た、いやしさを利用して、菌が発見されたのに「悪い人がなる」「神様、仏様が罰をあてる病気」そして「遺伝病」だと、こういうことをそのままにして、「ハンセン病は怖い病気だ」「うつる病気だ」、こういうことをお医者さんも、お役人さんも声を高くして叫んだために、ハンセン病の人たちは病気がわかると、家族や親戚の人たちに迷惑をかけないように、今でいえばホームレスのような生活をさせられたわけであります。



今から100年ちょっと前(1907年)に日本で法律が作られました。その法律は「ハンセン病の人たちは病院に入れて、外に出さない」、こういう法律(らい病予防法)でした。

「病院といって刑務所と同じように運営をしなさい」、刑

務所は悪いことをした人たちが入れられる。刑が終われば出られる。でも私たちは、いったん病院に入れられると外に出してもらえない。そこで死んで、火葬場の煙突の煙としてしか帰れない。国立ハンセン病資料館の隣にお墓がありますけれども、(平成21年現在)4070人が亡くなりました。病気になる人もいなくなり、人にうつらない病気になった。「悪いことしてごめんなさい」といってお医者さんや政府は謝りました。でも、骨になんでも故郷に帰ることができない人たちが眠っています。

そして病院だというのに牢屋を作りました。こんな病院どこにもない。どうして牢屋を作ったか?園内の周りにあるヒイラギの垣根、あの垣根は2メートル以上高かった。柵がゆってあって、犬の子一匹外に出られない。そこを一步でも外に出ると、子供でも牢屋に入れられる。みんな(国民)を病気から守るということで、私たちは閉じ込められた。

でも、ハンセン病はそんなに怖い病気か?今では、病気になる人は誰もいない。例え病気になつても、1年間薬を飲めば良くなる。うつるのかといつても、いまだに試験管の中で菌を増やすことはできない。菌が増やせないのに、そう簡単に人にうつるはずはないのに、そういう現実を無視されたわけであります。





2 入所の思い出

●解説

療養所に入ると患者は病気の重さなどでグループに分けられ、集団で生活しました。これは症状が軽い人がくらす雑居部屋です。子供の患者は男女別にわけられて暮らしました。寮父、寮母と呼ばれる大人の患者が親代わりになって子供たちの面倒を見たのです。平沢さんはこうした施設に入所したのです。



東京大学の立派な先生から、「平沢君は1年治療すれば帰れる」、こう言って紹介がありました。「東京大学の病院でも治療してあげられるけど、お金もいるよ」、「東村山には極楽の病院がある」、「お金もいらない」、「食べ物もただ」、「家もただ」、「お医者さんがいる」、「映画なんかも見られる」、こういう風に言われて入ってきました。

入ってみるとびっくりしました。学生服は全部脱がされて裸にされて、園内だけの縦縞の着物を着せられて、「名前をどうするか」と言わされた。なんで名前をどうするかって、一年で帰れるっていうのに、名前を変えたら学校に戻れない。そう思ったけれども、私は、平澤の「澤」の字を、今のやさしい「沢」に変えて入院しました。



3 少年寮の生活

18畳の部屋に、10人以上の人人が共同で生活する。いじめにもあいました。手足を縛られて、かもいのところに吊るされたり、叩かれて、今でも耳の後ろに穴があいています。なぜ、そういうじめられたか?

私のお母さんは清瀬の駅からバスに乗ると、当時のお金で10円。そのお金も惜しんで重いリュックサックを背負って、私のところに食べ物を運んでくれた。もしお母さんがそうして

くれなければ、私はとっくに死んでいたかもしれない、けれど療養所には、家族やお父さんやお母さんが面会に来ない人、手紙が来ない人もいます。世の中には色々な人がいて、この病院に子供を預けて、全然来てくれないお母さんもお父さんもいた。そういう人々は私に手紙が来ると、手紙を取って破って、火鉢の中で燃やしてしまう。でも私は、「ああ、この人々は本当に寂しいんだな」、私をいじめるのも、私の手紙を取っちゃうのも、面会に来て持ってきたものを食べるのも、お父さん、お母さんが来てくれない。この人々は気の毒でかわいそうだなあ、私はいいお母さんに恵まれ幸せなんだなあ、こう思ってそのいじめに耐えました。



4 療養所の生活

●解説

療養所のくらしはつらいものでした。それは患者なのに、病院で働くなければならなかったからです。患者が看護師の代わりに働くこともあれば、食事や洗濯、掃除、大工仕事もしたのです。例え目が見えなくても働くなければなりませんでした。さらに療養所の食事の材料を園内で作ることもしていました。子供も働くなければなりませんでした。これは治療に使った包帯を洗って巻きなおしている子供たちです。平沢さんが療養所に入ったころ、日本はアメリカや中国と戦争中でした。戦場では多くの命が失われ、国民は苦しい生活を強いられていました。戦争が激しくなつてくると、日本も攻撃を受けるようになります。被害を受けた療養所もありました。

園内の弱い人の面倒をみる。家を建てる。40近い仕事は、我々入所者が仕事をする。その仕事をちゃんとしなけりや、監房に入れられる。子供でも、目が見えなくても、園内の何かの仕事をしなければならない。



全生園の土地は東京ドームが7つできる広さです。35万平方



メートル、11万坪近くあります。この土地、広いなあと思うかもしれないけども、私たちはその中しか行けるところがなかった。ここで生きるほかになかった。だから、そんなに広い土地ではないわけです。

戦争も段々激しくなって、食べ物も無くなる。1日に1食、じゃがいも1個、さつまいも半分。おなかがすいて夜も眠れない。皆さん方にそんなこというとしかられると思うけれども、

理解してもらえないかもしれないけど、私は人間の肉以外、食べられるものは何でも食べて頑張りました。夜中に、おなかがすいて眠れない。タオルを水に浸して、口にくわえて寝たこともあります。栄養失調で多くの人が死んでいました。

B29(アメリカ軍の爆撃機)も毎日空襲で来る。そして日本は、戦争に負けました。私は戦争に負けるなんてことはない、神の国日本、天皇陛下がいる日本が、こう思っていました。

でもそのことが分かった時、あなたたちに自慢で話せないけど、やけになって、西武電車、当時は武藏野電車と言った。その電車にね、無賃で乗って、池袋から上野とか、浅草の闇市に行って、ケンカもしました、飲めない酒も飲みました。それがたたってね、病気が悪くなつた。

その時に、結核のために作った薬が「結核には効かないけど、ハンセン病に効く」、ということで日本に入ってきた。でもね、国は「ハンセン病の人を治してやろう」というんじゃないから、薬を買うお金を出してくれない。私の母は、土地を売って、お金を工面してくれた。

私は今でも両腕に、青いあざが残っていますけど、注射を毎日打ってらい菌はあつという間にいなくなつた。薬の量をどのくらい使えばいいか?らい菌を培養ができないから、適正な量がわからなかつたために、薬をやりすぎて、手がびりびりして、かご作りの仕事ができなくなつた。社会復帰もあきらめて今から60年前に、結婚しました。結婚しても、ハンセン病の治った人たちは子供を持つことを許されない。

5 自由と平等を求めて

解説

治療法が見つかり、ハンセン病は治せる病気になりました。しかし政府は政策を改めませんでした。病気の正しい知識を無視して患者さんを社会から隔離し、不自由な生活を強制し続けたのです。自由と平等を求める運動が全国の療養所で起き、平沢さんもこの運動に積極的に参加したのです。



私は、自分がハンセン病で苦しんだり、心を病んでる人たちや、車いすの人たちや、他の病気で苦しんでいる人たち、弱い人たちが幸せに生活できる、生きられる社会を実現する。そういうことで、60年近く患者、障害者運動に身をおいています。

清瀬や秋津や東村山や東久留米に行っても、私たちが「このおまんじゅうください」って言っても売ってくれない。「これは予約中です」。この近くでは「全生園の人はお断り」と貼り紙された。

私はさっき言ったように、障害者運動で東京行く、夜遅くなる。タクシー乗っても「全生園」と言うと降ろされてしまう。私が座った後は消毒される。患者会へ行っても、そして市役所へ行っても、昭和50年代前半、1970年代の後半まで私には湯のみでお茶を出してくれなかった。紙コップ、そういう差別をされました。いじめを受けました。

じゃあ、私は誰も差別してなかったか?結核で咳をしている人。私は後遺症で手が悪いから、アメの包み紙がむけない。「平沢さんアメなめる?」(結核患者さんがアメを)むいて私の手にのせてくれる。「ハンセン病になって、また結核がうつったらどうしようかな」、そうも思いました。精神障害者の人が出す大きな声、わめいたりされると、「ああこまったなあ」こうも思いました。知的障害者の人がバスの中で、「平沢さん!」とでっかい声をかけられると、びっくりして、恥ずかしくも思いました。

人間の中には、差別はしてはいけないと思なながらも、差別を受けながらも、自分が差別をしてしまう。こういう、心の中に悪魔のような悪い部分があるわけです。

では、それをどうするか?「許す心」。「恨みを恨みで返さない」。そのために私たちは40年前から木を植え続けました。全生園には今、3万本250種類の木があります。地域に感謝のしとして、緑を残していく。



●解説

現在の多磨全生園です。4月、入所者のみなさんが長年植え続けた桜の木が満開の時期を迎えています。全生園は桜の名所として知られ、市民のいこいの場になっています。桜だけでなく、園内は1年を通じて様々な花を楽しむことができます。園内の緑は入所者と市民、互いの理解を深める大切なきっかけになっているのです。



全生園も私が来たときは入所者が1300人もいた。働く職員はたった50人。

今は入所者が283人、職員は383名います。看護師さんは私が来たときはたった10人だった。今は144人。

家もみんな雑居で生活していたのが、みんな1人で暮らせるようにしました。お医者さんにも来てももらえるようにしました。らい予防法が無くなり、裁判に勝ち、こうして私自身、生きていますけれども、故郷に帰れる、生まれた家に足を踏み入れる日がまだまだ、宇宙のどこよりも遠いところであります。

らい予防法が廃止されるまで、地元の皆さん、子供たちから、平沢さん(出身地)どこ?と聞かれると、「北関東の生まれです」と言った。らい予防法が廃止になって「茨城県」と言うようになりました。2年前から「茨城県古河市」と言うようになりました。私の町は城下町、お寺がいっぱいある。

それで私は一昨年(平成20年)12月4日、70年ぶりに私の母校の小学校に行って、講演しました。子供たちは「平沢さんお帰りなさい」、「ハンセン病にかかって苦しんだりうけど」、「私たちの先輩として誇りに思います」、こういう作文を書いて送ってくれました。でも、私の実家からは誰も来てくれない。私には弟や親戚の人、いっぱいいます。そういうとき、親戚の人たちは小さくなっているのでしょうか。私の弟たちも、その子供や孫たちもひっそりとして、ということは、いまだにハンセン病に対する間違った考え方がある……(病気の正しい知識を)、知らないために……。

もし、私が肉親だということになれば、みんなから差別、いじめを受ける。これが現実です。一度間違った考え方で植えつけられた思いは、中々解きほぐすことが出来ない。



中学生のみなさんへ

今日講演を聴いてくださった170数名の人たち、これから来年、再来年は「進学」です。そして、高校出たら働くとしても働くところも少ない。無理に学校に行って、あるいは家庭で生きていく上には、色々な苦しみが、多いわけです。でも99パーセント自分の事に力を入れる中で、1パーセントを他の人たちに心を寄せ合ってください。

猿山のボス猿。何かあげれば自分だけむしゃむしゃ食ってしまう。でも、あなたたちのお父さんやお母さんやお姉さんや御兄弟、誰を一番大事にするでしょうか?人間にはハート、愛があるわけです。私は、どうにもならない精神、さっきも言ったように、若い時は悪いこともした。でもそれに気づいて、人間らしく生きようとしたとき、今日の幸せをつかむことができたわけあります。

幸せは、喜びは、自分で作るものなんです。人が与えてくれるものじゃない。ちょっと難しいかな?皆さん方も中学校2年生になったんだから、ちょっと考えてみてください。

そして、悩んでることがあったら、お父さんお母さん、先生、友達とよく話し合う。いやしくも自らの命を絶つようなことは絶対にあってはならない。この命は、この地上で1回だけ私たちに与えられた尊いものなのです。誰もが色々な立場で命を生きていかなければならない。

皆さん、地球の21世紀の宝物は何か?お金でしょうか?物でしょうか?この世の中で社長さんやえらい役人や政治家になる人がいるかもしれません。でもその人、総理大臣一人では日本の国は成り立っていない。バスの運転士さん、パンを作る人、家を建てる人、弱い人の面倒見る人、銀行でお金を勘定する人、色々な立場の人たちが一緒に生きているから。この地球は成り立っている。

そういう子供たち、地球の宝物と私は思っています。

つらい時、私も色々な何千何百の友達、様々な人に支えられて今日があるわけですから。皆さん方にも、そのことを考えてほしい。ちょっと説教気味だと思うかもしれないけどもくみとて下さることを切に念じ、祈願し、私の話を終わらせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

発行日 2011年2月25日
編著・発行 国立ハンセン病資料館
協力 平沢保治、當摩彰子、佐久間建